開かれる越美山系　徳山、根尾の遺跡と文化

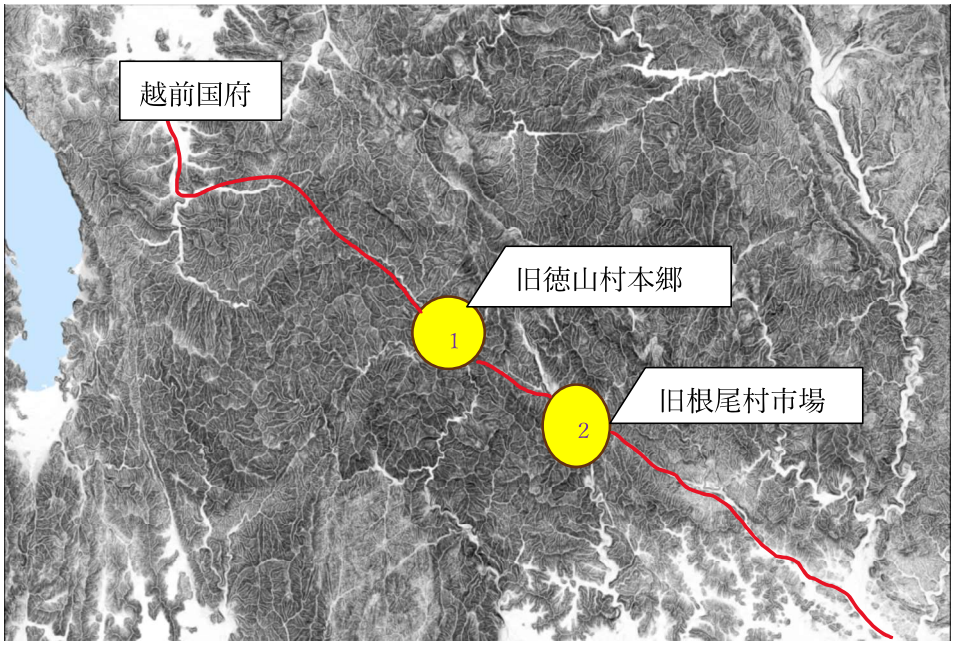
鶯谷高校　社会研究サークル部
安藤啓一郎　　河島光希　　片桐大吾
近藤龍一　　横山政宗

はじめに

冠山峠は岐阜県の旧徳山村（現揖斐川町）と福井県今立郡池田町の間に位置し冬は通行不能であったが、令和 5 年 11 月 19 日に冠山トンネルが開通し通年通行が可能となった。その徳山と隣村の根尾は越前とのつながりが美濃より深く、旧石器、縄文遺跡の遺構が多く出土する。越美山系は石灰岩質で緩斜面、段丘、洞窟が多く、傾斜量図からも確認できる。湖底に沈んだ遺跡も含めて各遺跡を紹介し新たな観光資源としたい。

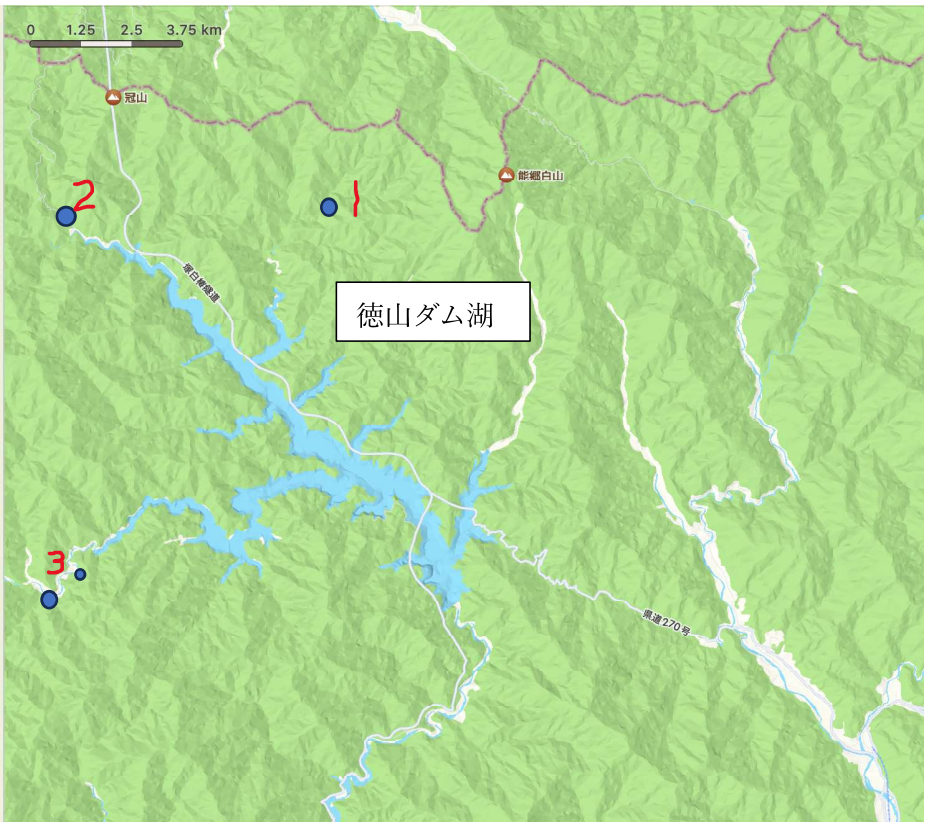
１．岐阜、福井県境の地形と遺跡、徳山ダムとの関係

飛騨地方から美濃地方にかけて石川県、福井県と接する県境は白山から能郷白山と呼ばれる両白山系といい石灰岩質で山の稜線（尾根線）は緩やかで、その稜線に沿って石器時代や縄文時代の遺構が多く確認できる。傾斜量図（下図）からも山の稜線は広く、居住や交易には支障がなかったと推測できる。



旧徳山村（上図小①）、旧根尾村（上図大②、現本巣市）に人々が住み始めたのは縄文時代の中期で石鏃、石匙、石斧などが戦前から出土されている。多くの遺跡は孤立してあるのではなく、尾根線によって結ばれているのではないかと想像できる。上図の傾斜量図を見ても北西から南東へ多くの尾根線、谷線が伸びていることが確認できる。さらに、この尾根線をうまく利用して集落や遺跡との往来が可能だったと推測できる。岐阜、福井県境はチャート層が広範に分布し割れ目が鋭くナイフ型石器として槍先や小刀などの用途として使用され、それらの石器類も各遺跡から出土されている。しかし多くの土器が出土するのは太平洋戦争末期の昭和 19 年、食糧増産の必要から開墾が奨励され、旧徳山村の宮が原で開墾が始まってから

である。このとき、開墾地から石鏃 20 個、磨製石斧２個、石棒１個、土器の破片が見つかった。そして戦後の 1949（昭和 24）年、地元徳山村の中学校、小学校に勤務する先生や県から派遣された調査員により、本格的に発掘作業が始まった。「この遺跡を正式発掘すれば、竪穴住居跡や、その他の遺物も発見でき、集落史の上からも、美濃と北陸との文化交流がわかり考古学上価値ある研究調査ができる。」（徳山村史 1986（昭和 61）年３月発行）と報告された。しかし、1957（昭和 32）年徳山ダムの建設計画が持ち上がり、1987（昭和 62）年 3 月徳山村廃村、2008（平成 20）年に、日本最大の貯水量を誇る徳山ダムが建設され、発見されていない遺跡は湖底に沈んだままである。ダム工事によって水没した縄文遺跡は１４ケ所で、わずかに残るのは小屋どこ遺跡、石橋遺跡、戸入地区の２ケ所の計４ケ所だけである。これらの遺跡は越前や近江との国境に近く北陸や関西の影響を受けた土器が多く発掘された。冠山トンネルが開通し徳山ダム湖を見下ろしながら車窓を楽しむことができるが、旧徳山村内を通過し冠山トンネルを経て福井県の池田町までの約５０km の沿道には宿泊施設もドライブインもなく、冬季は冠山トンネルの手前にあるトイレは使用禁止となり長時間運転に支障が出ているのも事実である。



1 小屋どこ遺跡　　2　石橋遺跡　　3　戸入遺跡

徳山ダムの歴史

1957（昭和 32）年　徳山ダム建設計画発表

1983（昭和 58）年　全村集団移転（村民約 1500 人）

2008（平成 20）年　徳山ダム完成　貯水量は６億 6000 万トン　日本一の貯水量を誇る。

徳山会館より撮影

２．徳山・根尾の歴史と産業

美濃と越前は越美山系を背に対立関係にあり、旧徳山村と旧根尾村は時代ごとに平家と源氏、南朝と北朝、朝倉氏と織田氏の間で翻弄されその帰属については越前との縁が深かった。古代において越前は、現在の東海北陸地方では唯一の大国であり、美濃や尾張は一ランク下の上国であった。有力な国司や守護は朝廷や幕府から越前に赴任し、「いざ鎌倉」というときには越前から美濃に入り「東下り」したという。傾斜量図で確認したように北西から南東にかけて川筋や尾根線がのび、鎌倉への往還を容易にしたと考えられる。南北朝の時代は後醍醐天皇の南朝方を支持し、新田義貞に関する遺跡も越前や徳山、根尾で多く確認できる。室町時代は三管領四職のうちの斯波氏が当地を治め被官の朝倉氏が一乗谷に居を構え北陸全般を勢力下においた。同じく斯波氏の被官の織田氏は尾張に赴任し尾張から美濃を支配した。

文化面では古代より日本海側の各地と大陸との間で交易が確認されており、都に近い若狭や越前に渤海や宋の使節が訪れている。特に和紙の製造技術は大陸から越前へ、さらに美濃に伝播し「鳥子紙」「美濃和紙」は現在でもその伝統を引き継いでいる。さらに鯖江の僧侶が越前から速星峠（這法師峠）を経て根尾、徳山に入り檀家を回った記録も残っている。農産物も美濃と越前との間での交易は盛んで、特に揖斐で生産された美濃茶は冠山峠から越前池田、鯖江などを経て九頭竜川、三国湊から北前船で販路を広げた。

３．過疎化と越美国境の観光開発

高齢化と後継者不足、耕作放棄地の増加は各地で見られる社会現象で農地の維持管理を難しくしている。当地では「徳山唐辛子」などの農産物のブランド化を図り地産地消を推進し付加価値の向上を図っている。現在は本巣市の能郷で栽培され大都市を中心に流通している。激辛ブームで販路が拡大され「徳山唐辛子」を食材にした「地獄うどん」は名物で徳山村の伝統と食文化を後世に伝え地元の道の駅の看板メニューとなっている。

おわりに

旧徳山村冠山トンネル開通後、トンネル前後の「道の駅」の利用者数が福井県側で約 1.3 倍、岐阜県側で約 1.8 倍記録し今後も増加傾向が見込まれるが、日帰り客から宿泊客をどう増やすか、今後の観光政策に期待したい。

鉄道や自動車もない時代、現在辺境とよばれる地域が意外にも先進的な地域であったり、交流や交易が盛んであった事例が多い。鉄道沿線や高速道路沿いに都市は発達するが、それ以前の地形や集落を調べることによって未発見、未開拓の場所があるのではないか、限界集落になるのも時間の問題だが、今回の調査からあらためて地図をながめ確認したい。

（参考文献）徳山村史